

より効果的な学習者支援のための事例研究 科目別ドロップアウト誘発機会に基づくメンタリング

A Case Study for More Effective Learner Support and Mentoring based on Dropout Triggering Events of Each Online Course

吉本弥生 (Yayoi YOSHIMOTO), 奥野浩之 (Hiroyuki OKUNO), 合田美子 (Yoshiko GODA)
CELL 教育研究所 (CELL Research Center for Educational Development)
Email: yoshimot@otemae.ac.jp

あらまし: eラーニングの実施にあたって、ドロップアウトの減少は、メンタリングの目的の一つとして位置づけられている。ドロップアウトを減少させるためには、その動向を把握し、要因を捕捉することが必要となる。本研究では、ドロップアウトの原因を探り、それを反映させた学習支援をおこなった結果を報告する。具体的には、ドロップアウトの要因に関する分析と各科目のドロップアウト要因に基づくメンタリングの実践の報告をおこなう。ここでは、2008年度のデータをもととしたメンタリング効果を扱うものとする。

キーワード: 学習者支援、メンタリング、ドロップアウト

1. はじめに

本研究の目的は、ドロップアウトの動向を分析し、ドロップアウトの発生する要因について検討すること、それを反映させた学習支援をおこなった結果を報告することである。

eラーニングの実施にあたってのドロップアウトの減少が、メンタリングの目的の一つとして位置づけられていることから、これを減少させるためには、その動向を把握し、要因を捕捉することが必要になると思われる。そのため、本研究では、大手前大学において実施したeラーニング科目の進捗率をもとに分析し、ドロップアウトが発生する要因について検討することとする。

2. eラーニングにおけるドロップアウトの概念

2.1 ドロップアウトの位置づけ

Simpson は、ドロップアウトの高い発生率を、学生支援のプログラムの内容に問題があるという立場に立ち、教育機関が高品質な学生支援プログラムを持っていれば、学生の維持率は最大化されるとしている。ドロップアウトは、eラーニングの内容によって発生することが強調され、ドロップアウトの発生は否定的に位置づけられているのである。

このような、Simpson の説がある一方、Horton は、次のような説をとる。

対面授業と比べてeラーニングに高いドロップアウト発生率が見られるのは、例えば、試しに受講してみただけの学習者や、eラーニングを対面授業に比べて安易なものだと誤解している受講者もいるという背景があり、このことをeラーニングの開放性

として積極的に捉えている。

すなわち、対面授業に比べ、学習環境による周囲からの圧力が少ない分、匿名性が高いeラーニングは、比較的簡単に受講が中止できることを肯定的に捉えている。

この立場に立てば、高いドロップアウト率は必ずしも悪いことではないという結論が導かれる。このことは、実証的な先行研究においても指摘されている。

つまり、eラーニングをドロップアウトする者の中には、試しに受講してみただけの受講者やeラーニングを安易なものとして誤解して受講した受講者である「回避できないドロップアウト」があり、学習内容や支援の方法によって受講を辞めた者である「回避できる可能性があるドロップアウト」と区別して考えるべきことが指摘されている。

2.2 ドロップアウトを誘発する契機

ドロップアウトがどのような契機によって誘発されるのかという点について、松田岳士は、上記のような立場を前提として①「不必要なドロップアウト」(回避できる可能性があるドロップアウト)と②「やむを得ないドロップアウト」(回避できないドロップアウト)とを区別し、前者を防止することがメンタリングの目標の一つであるとしている。そのうえで、ドロップアウト発生の契機となる時点を時間の経過とともに捉え、それがなぜ発生したのかを考えるドロップアウト誘発機会(Dropout Triggering Events)という概念を提唱している。

ドロップアウト誘発機会(Dropout Triggering Events)は、多くのeラーニングコースには、学習者から見てドロップアウトを誘発する機会となる活動、課題、指示が存在すると考え、これらの総称した呼

び名である。

この概念は、ドロップアウトの発生を時間の進行に対応させながら検討するものである。大規模なeラーニング実施組織として知られるイギリスのオープンユニバーシティにおけるドロップアウトの発生状況が、この概念にもとづいて分析された結果、時間の経過とともにドロップアウトが増加し、最終的なドロップアウト率が60%近くに上ることが報告されている。

ここでは、最初の課題提出がドロップアウトのもっとも大きな契機となっていることが指摘されている。すなわち、学生に課される課題等の物理的な負荷がドロップアウトを招く大きな要因の一つであり、これらをどのように緩和し、ドロップアウトを回避しうるかがメンタリングの主要な課題として掲げられることになる。

3. 大手前大学における実践事例の分析

3.1 ドロップアウトの分析とその対象

大手前大学におけるドロップアウト回避の取り組みに移りたい。分析は、以下の二点である。

まず、ドロップアウトの要因に関する分析は、研究対象を平成20年度春、秋学期開講の4科目とし、分析方法は、進捗率と科目ごとの学習活動を図表化し、比較検討するものとする。

次に、各科目のドロップアウト要因に基づくメンタリングの実践をおこなう。その際の研究対象は、平成20年度、秋学期開講の4科目とし、分析方法は、平成20年度、春学期終了後におこなったドロップアウト要因の分析結果からメンタリングアクションプランの作成と、アクションプランにそって、学習支援の実施をおこない、実際の学習進捗率とメンタリング活動を科目ごとに図表化する。そして、平成20年度、春学期の進捗率と比較するものとする。

3.2 分析の方法

各々の科目について、進捗率を図表化し、それぞれの科目におけるドロップアウト発生の推移を明らかにする。同時に、各コンテンツで学生に課された課題や活動、指示などの負荷が、ドロップアウトの発生にどのように関係づけられるかを検討する。また、これとは別に、メンタリングがどのようにドロップアウトの発生に影響を及ぼしたと考えられるのかという分析も行う。

大手前大学におけるメンタリングの概要は以下のとおりである。

2008年春学期は、フルタイムのメンタ2名であり、2人とも未経験である。実施場所は、さくら夙川キャンパスといたみ稲野キャンパスの情報基盤センター教育管理室である。平日24時間以内に第1回答し、学習内容以外の質問・相談へ回答する。さらに、

学習内容に関しては担当教員へメールで転送をおこなった。また、サポートの方法は、LMSのお知らせ機能、質問・相談の機能(自分の設定したアドレスへ転送する機能あり)、大学のメール、大学内の掲示板、大学のラーニングポータル、電話、対面での相談、ハガキ(春のみ)である。

また、開講科目の概要は、以下のとおりである。

<2008年春学期>

- ・「カラーコーディネイト(3級)」 20名
- ・「総合基礎100」 58名
- ・「プレゼンテーション演習 I/自己表現・ディベート100」 78名
- ・「日本文化・阪神文化100」 27名

<2008年秋学期>

- ・「カラーコーディネイト(3級)」 102名
- ・「総合基礎100」 78名
- ・「プレゼンテーション演習 I/自己表現・ディベート100」 136名
- ・「プレゼンテーション演習 II」 117名
- ・「日本文化・阪神文化100」 71名

上記をふまえた上で、次に実践例をみてみよう。

3.3 実践例

2008年度大手前大学において、春学期に実践した学習の完了率の推移(図1)を見ていくと、メンタの支援の成果がうかがわれるのだが、メンタが学生のドロップアウトを防ぐために、LM上から支援メールを送るなどの支援をしていたにもかかわらず、どの科目も共通して第7回が落ち込んでいる。

顕著な例として、「プレゼンテーション演習 I」が

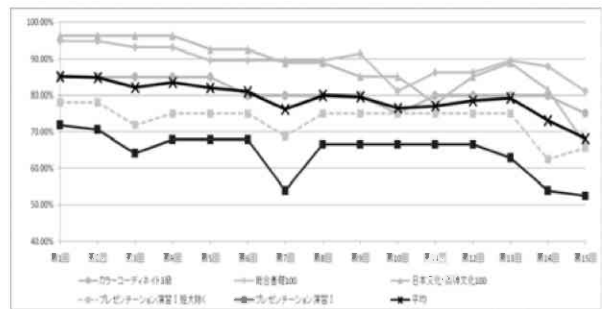


図1

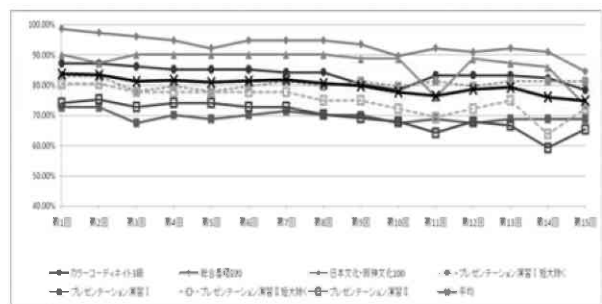


図2

あげられよう。7 回目の落ち込みが起こった理由として考えられるのは、テストすべてに回答しないと先へ進めないシステムになっていたことである。

2008 年度秋学期の完了率（図 2）を見ると、先にあげた第 7 回の落ち込みが、嘘のようになくなり、安定したグラフになっている。

次に、メンタリングによる各科目の実際の学習進捗率をそれぞれの特徴とともに見てみよう。

まず、（図 3）の「カラーコーディネイト 3 級」では、第 6 回、10 回、15 回と落ち込みが見られる。ここでは、学生への負荷がかかっていると考えられる。

第 6 回では、通常の e ラーニングコンテンツの場合、ひとつのコンテンツに 3 節あるものが、この回は 4 節になっている。即ち、授業量が多く、負荷がかかっているといえる。

第 10 回は、e ラーニング科目の中間科目調査や書類、他にミニテストやレポート提出などの細かい作業が多く、同じく第 15 回も、調査やアンケート、テストなどの作業が多かったため、学生への負荷がかかり、数字に表れている。

（図 4）の「総合基礎 100」は、学生がレポートを書き、推敲する必要があるものが多いため、その分、負荷がかかっている。それぞれ、第 5 回、第 10 回、第 15 回とあるが、特に、第 10 回については、自分でレポートを書き、推敲する個所があるという 2 倍の作業量になっているため、それだけ時間がかかり、

提出に至らない学生が増えていると考えられる。

（図 5）「日本文化・阪神文化 100」は、第 10 回までは、先ほどの 2 科目より安定していたにも関わらず、第 11 回まで来ると、突然、落ち込みが激しくなり、第 15 回も下がっている。ここでは、ディスカッションが入っているために負荷がかかったと考えられる。

また、先に見たように（図 6）「プレゼンテーション演習 I」の 7 回目の落ち込みが起こった理由として考えられたのが、テストすべてに回答しないと先へ進めないシステムになっていたことであったが、第 14 回には、通常より長い授業がおこなわれており、これも落ち込みの原因のひとつと考えられる。

そこで、大手前大学では、メンタのガイドラインを作成し、それに基づくメンタリングの実践をおこなった。

各科目のドロップアウト要因に基づくメンタリングの実践を見ていきたい。

2008 年度、春学期終了後、おこなったドロップアウト要因の分析結果から、（図 7）メンタリングアクションプランを作成した。

アクションプランにそって、学習支援を実施した結果、次のような結果が出た。

先に述べたように（図 8）「カラーコーディネイト 3 級」は、第 6 回、10 回、15 回と落ち込みが見られていた。

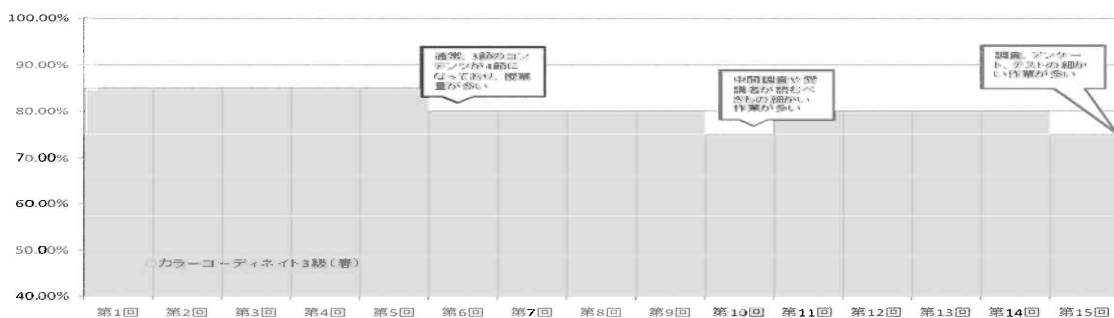


図 3

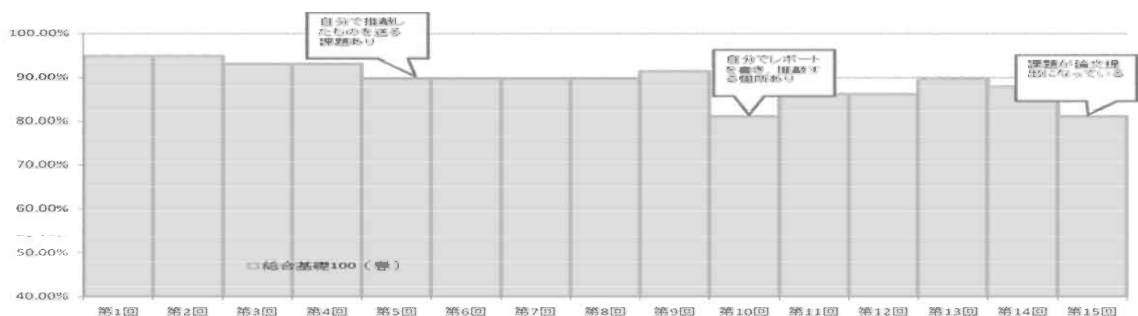


図 4

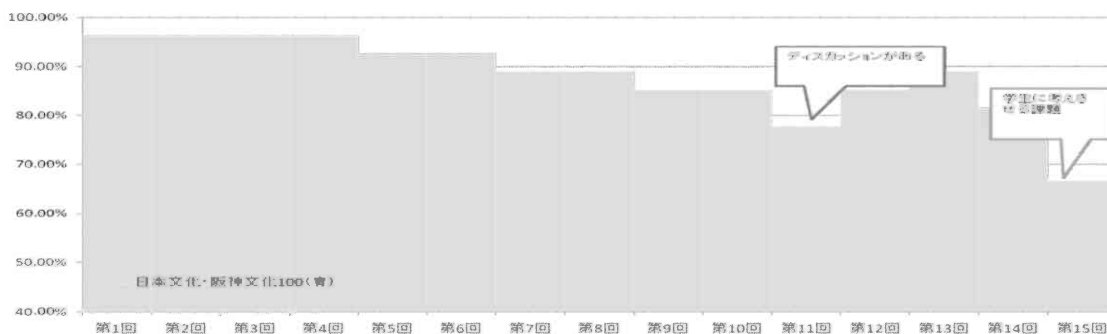


図 5

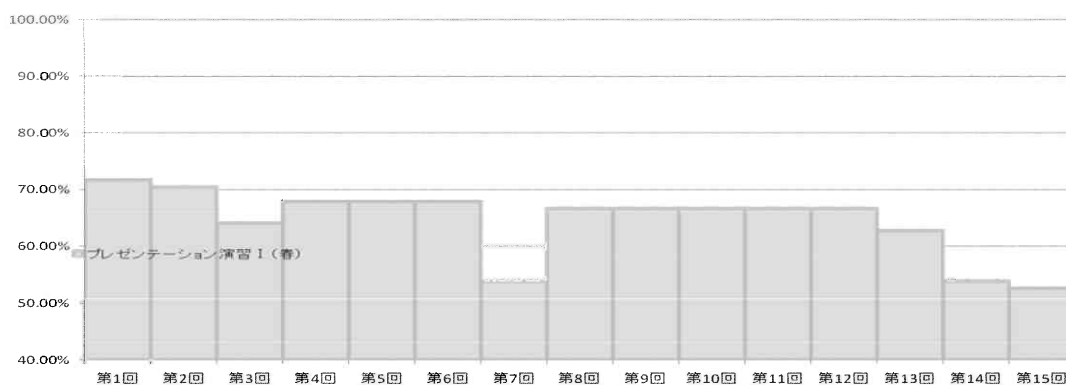


図 6

学年	科目名	担当教員	授業時間	出席率 (%)
2008年度	日本文化・阪神文化100(青)	山本 浩二	木曜 15:00-17:00	95.00%
	プレゼンテーション演習 I (春)	山本 浩二	木曜 17:00-19:00	72.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 19:00-21:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 21:00-23:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 23:00-25:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 25:00-27:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 27:00-29:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 29:00-31:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 31:00-33:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 33:00-35:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 35:00-37:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 37:00-39:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 39:00-41:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 41:00-43:00	85.00%
	総合基礎100	山本 浩二	木曜 43:00-45:00	85.00%

図 7

これらを改善すべく、メンタは、秋学期に第 5 回のあたりで支援メールをおこない、第 10 回では、「感じたことを言葉にしよう！」の回答について、アクションをおこしている。また、第 15 回の落ち込みの前、第 14 回のあたりで支援メールをしている。第 5 回・10 回もそれぞれ、メンタは支援メールをおこなっており、いずれもその前回におこなわれ、その次の回に結果が出ている。

次に、(図 9)「総合基礎 100」は、学生がレポートを書き、推敲する必要のあるものが多いため、その分、負荷がかかり、特に第 10 回の落ち込みは激しかった。そこで、メンタは、第 5 回が始まってすぐ支援メールを送り、第 10 回では、対面授業、第

15 回では、その前の回の第 14 回に支援メールを送った。

(図 10)「日本文化・阪神文化 100」は、第 11 回までは先ほどの 2 科目より、安定していたにも関わらず、第 11 回まで来ると、突然、落ち込みが激しくなる。ここで、ディスカッションがある。また、第 15 回も下がっている。これは、学生に考えさせる課題が出ており、学生にかなりの負荷がかかっている証拠である。

メンタは、第 11 回で、チューターの紹介や対面授業の出席についてのお願いをおこなっており、支援メールを第 12 回と 14 回でおこない、学生の授業の遂行を促している。

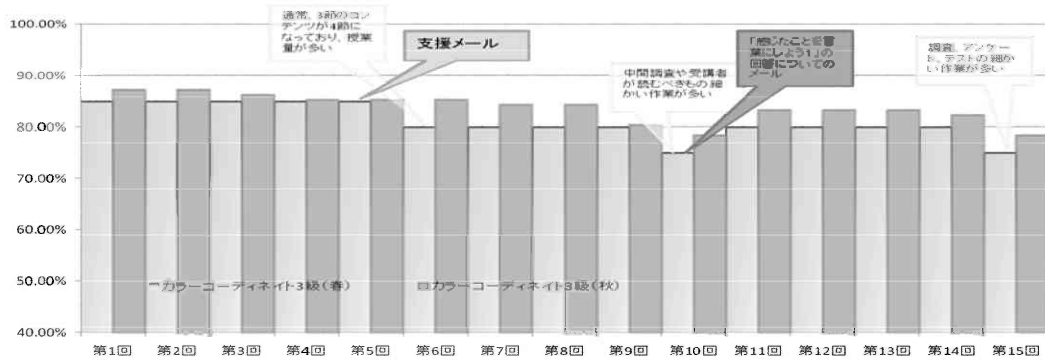


図 8

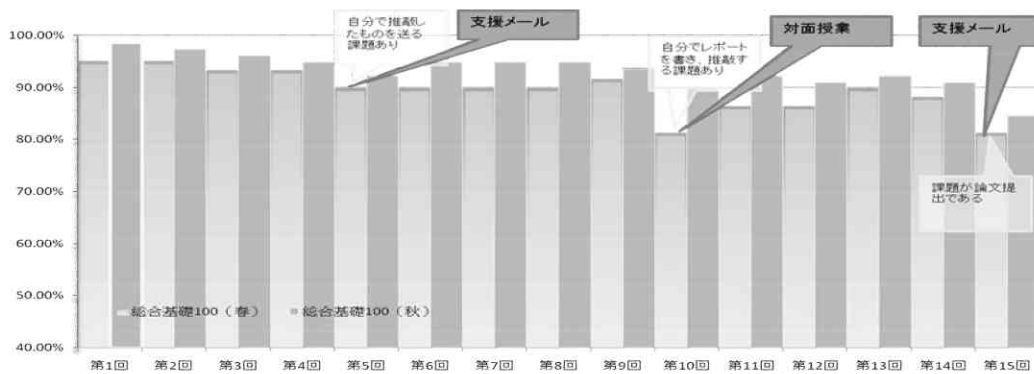


図 9

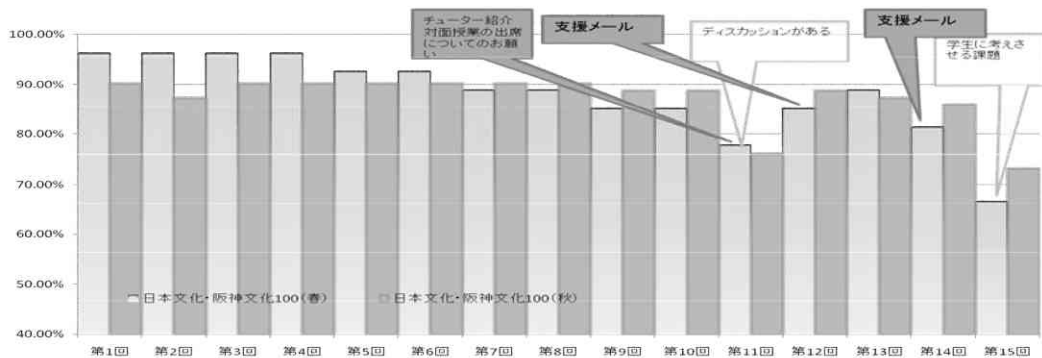


図 10

また、(図 11)「プレゼンテーション演習 I」では、7 回目の落ち込みの原因は、テストすべてに回答しなければ、先へ進めないようになっていたこと、つまり、100 点を取らなければ先へ進めなかったことが、その原因として考えられた。それを受けて、40 点以上であれば、先へ進めるよう改善した結果、落ち込みはなくなり、約 70%ほどに抑えることができた。他にも落ち込んだところは、第 14 回・第 15 回であるが、支援メールやアンケートの実施などで、さらにのびている。

これまで見てきたように、大手前大学のメンタリ

ングアクションプランは、春の問題点をもとに秋に向けて作られ、実践された。その結果、先行研究では、完了率が40%近くになっていたのに対し、大手前大学は、おこなった後、メンタに対するアンケートを実施した。その項目は、とても満足している、満足している、満足していない、全く満足していないの4項目である。満足している項目が70%を超えており、メンタに対する満足度が高いことが、ここから知れる。

また、お試し受講を全員にしているわけではないため、Hortonのいう能動的なドロップアウトはまだ、完全には防げていない。これは、今後の課題として位置づけられるだろう。

今後、大手前大学の具体的課題として挙げられる点は、「回避できないドロップアウト」と「回避できるドロップアウト」を履修時に振り分けること、支援の個別化、より効率的な支援方法の模索である。

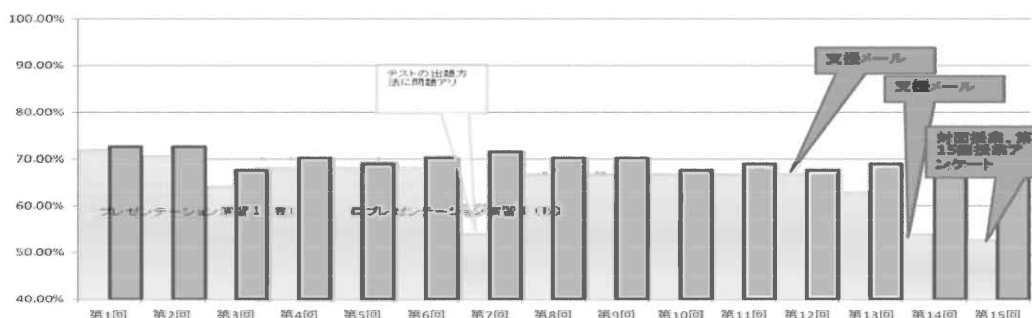


図 11

5. むすびにかえて

以上のように、大手前大学では、受講者の学習活動を支援するメンタがフルタイムで常駐し、学習者支援活動を実施している。その活動内容は、担当教員と個別に協議のうえで科目ごとに策定され、進捗管理や支援、コメントの返信など、学習者の心理的な支援を行い、効果的な学習を促進させるとともに、学習を通じて訪れるドロップアウトの契機を可能な限り抑止し、学習者の学習活動を成功裡に導くことを目標としている。

このような前提の下で実施されるeラーニングの実践において、大手前大学では現在、科目の平均修了率が70%を超える現状にある。しかしながら、ドロップアウトがどのように発生し、またそれは何に起因するものかという動向を辿ることによって、ドロップアウトの発生はさらに低く抑えられる可能性がある。

本研究で分析の対象とした大手前大学における進捗率は、受講者数の絶対数が限られたものであり、その意味で、修了率に大規模な母数を有するオープンユニバーシティ等の事例と単純に比較することはできない。

しかしながら、実施した複数の科目を比較検討し、そこで行われたメンタリングや課された負荷を相対化することによって、ドロップアウトの発生の契機を指摘することができるように思われる。

参考文献

- (1) 松田岳士, 原田満里子: “eラーニングのためのメンタリング 学習者支援の実践”, 東京電機大学出版局, 東京, pp.50-58 (2007)
- (2) 特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソーシアム編: “eラーニング白書 2008/2009年版”, 東京電機大学出版局, 東京 (2008)
- (3) Ormond Simpson: “Supporting students in online, open and distance learning”, 2nd ed, Kogan Page, London, pp. 163-182 (2002)